

田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『トリとロキタ』

[2022年／ベルギー＝フランス／89分]

監督・脚本：ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌ
出演：パブロ・シルズ、ジョエリー・ムブドゥ、アウバン・ウカイ、ティヒメン・フーファールツ、シャルロット・デ・ブライネ、ナデージュ・エドラオゴ、マルク・ジンガほか

©LES FILMS DU FLEUVE – ARCHIPEL 35 – SAVAGE FILM – FRANCE 2 CINÉMA – VOO et Be tv – PROXIMUS – RTBF(Télévision belge)

こんなにも残酷な世界に 私たちは住んでいる

コロナ禍によって、この社会の格差が深刻なレベルになってしまっていることが可視化された。世界規模に広がっている格差の底辺には、劣悪な環境に置かれている人々がいる。私たちの一見豊かな生活は彼らの犠牲の上に成り立っていて、そのことに気づきつつも何もできないでいるのが実状ではないか。

この作品は、まさに格差の底辺にいる保護者のいない未成年の難民の物語だ。アフリカからヨーロッパに逃れてきた幼い少年トリと10代の少女ロキタは、いまはベルギーのリージュで暮らしている。トリはベナンから、ロキタはカメルーンから来たが、地中海を渡るボートで出会って以来ずっと寄り添って生きてきた。だがベルギーの入国管理局は、2人が偽りの姉弟だと見抜き、トリにはビザを出したが、ロキタには出さない。

タルデンヌ兄弟監督は、上田映劇でも反響を読んだ『息子のまなざし』にも見られるように、感情は抑制しながらも現実の厳しさをリアルな描写で投げかけてくる。この作品でも、難民たちが日々どれほど緊張を強いられているかを簡潔な演出で表現している。

ロキタは家族に仕送りせねばならず、出国仲介業者には金をむしり取られ、麻薬の売人の手下となって金を稼いでいる。危険な不法行為に手を染め、性的虐待にも耐え、ビザが下りたら家政婦になるとの夢をトリに語る。辛い目に遭うロキタをトリはやさしく慰め、一方ロキタも、トリが危険な場所に近づかぬよう心を配る。互いのさりげない励ましやいたわりの仕草が心に沁みる。

偽造ビザを手に入れるために、ロキタはついに大麻製造所の苛酷な労働に就く。3か月間、外部との連絡を絶たれた密閉空間で、30度の気温に耐えてたった一人で働くのだ。まるでサスペンスまがいの恐怖に満ちた生活だが、日本の入管をめぐるニュースを見れば、私たちの身近にもこんな思いをしている人がいることが分かる。

けれどこの作品は、子供の難民の悲惨な物語で終ってはいない。トリとロキタが、迫害され、搾取され、尊厳を踏みにじられながらも、それに対抗していく強さを持つ存在であることが、説得力ある映像で伝えられている。そして彼らは今後どう生きていくのか。見守りつつ、私たちは自分ができることを探さねばならない。



田村志津枝プロフィール：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスピンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオジエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。